

## ■赤とんぼ

もう二十数年も前になる。夏の暑さがもう一つ来ていよいよ秋かというある日の午後、深坂杏香はあるライブハウスの前にできた行列のひとりになって、開場時間を待っていた。その手には何ヶ月か前にインターネットから入手したチケットが握られている。

そもそも今回の「赤とんぼコンサート」を知ったのも、インターネットだった。杏香が当時よく聴いていた城戸広貴というフォーク歌手の公式ホームページをやっと見つけ出し、その掲示板に「初めまして」の書き込みをした。その約二年後に舞い込んできたのが今度のコンサートの知らせである。

実を言うと杏香がそれまで彼のコンサートに行ったのは、二十年にも及ぶファン歴にもかかわらず、たった一度きりだった。何の因果かと不思議ではあったものの、それから更に遡ること数年前まで一地方都市に引っ込んでいた彼女には、それは半ば当然という思いもあった。だがそれも地域興しのイベントの一コーナーとしてであって、きちんとしたコンサートの形ではなかったから、「いわば今日が初めての、ちゃんとしたコンサート！」と彼女は考えていた。

この数年間で杏香自身がいろいろ経験し、それから鑑みるに、ライブハウスが普通のコンサートと異なるのは、公演前に飲食もできることと、基本的に自由席であるということ、それにステージと客席とがほぼ一体化するといった点だ。また、ライブの主役たるアーティスト自身が出口に立ってお客さんを見送ることも多々あるらしい。

そしてその日も、その典型的なライブコンサートの形式は見事に保たれていた・・・。

しかしそのコンサートは、彼女にとっては甚だ異質なものとなってしまった。

まず彼女が「おかしいな」と気づいたのは客層全体だ。そこに集まってきているのは殆どどこかチャラチャラした女性ばかり。彼女はそれまで自分なりに、広貴が醸し出す歌の世界についてきたつもりでいた。抒情歌とシャンソンを歌いこなす彼の音楽活動に刺激を受けて大学でフランス語も覚えた。だから、他のファンたちもきっと、いわばそれなりに筋の通った理念を持った人たちが来るに違いない・・・そう考えていたのだが、今周りに見えている女性たちにはどうにもそういう点を見いだすことができない。それが彼女固有の完全なる思い込みであることは、自分にも分かっているつもりではあったが、それをさっ引いてもあまりにも違いすぎる。

開場時間が過ぎて、杏香も中に入っていった。入口が狭いが故にロビーもすぐに見渡せる。見ると、近くにCD売り場がある。そこに二つ目の驚きがあった。CDは広貴ではなく、彼と比べるといくらか二枚目のアーティスト・金井ジュンのものしかなかったのである。

たしかにチケットには広貴のほかに金井ジュンの名前もあった。それからクラシック系から転向したポップデュオ・カンシオンも載っていた。そうすると、いやそれにしたって、

出演者全員のCDがあるのが自然なのに・・・と彼女はここでも首を傾げる。

まあここは適当に引っ込んだ席でもとっておこうかしらと、杏香は舞台に向かって右端の前のほうに座った。何よりそこはテレビカメラの真後ろだった。容姿というものにまったく自信のない彼女は、およそカメラには映りそうもない席を選ぶ。

しばらく時間があつたので、パスタを注文する。いわばこれがライブハウス側にとっての大きな儲けになるのだろうかなどと考えていると、開演時間になっていた。店のスタッフが料理をきれいに片付け、キャンドルに明かりを点していった。うん、なかなかいい雰囲気だ・・・。

初めに出てきたのは、金井ジュン。杏香にとっては、殆ど顔と名前と代表曲一曲しか知らないアーティストである。

「今、僕はまた新しい一歩を踏み出します。名前もその為ひらがなからカタカナにあらためました。それではまずこの歌から聴いて下さい。・・・」

それから何十分が経過したであろう。杏香はこの、縁もゆかりもないアーティストの世界で呆然と時を過ごした。インターネットで一方的に調べてチケットを買ったのならともかく、今回のコンサートの情報源は広貴の公式サイトである。その時も別段「私は応援で行きますので」とか、そういう文言はなかったし、広貴の歌に「赤とんぼの思い出」というものがあるから、彼女はてっきり広貴のコンサートだと思い込んでやって来たのである。その実際がよもや他の人の改名再出発コンサートだとは・・・。

そういえば、客席の真ん真ん中に椅子を連ねて座っている一団がある。ちょうどジュンの家族と考えればそう見えなくもない。両親と兄弟姉妹、妻子・・・。

続いてカンシオン。このデュオについては、もともとがクラシック畑だったということ以外知らない。たしかにサウンド的には綺麗だろう。しかし歌詞の内容が心に入って来ない。イマドキの若者は・・・と言い出せば、それだけ自分自身の年齢が思い知らされるようでもあるが、仕方ないことに彼らもその部類だった。

広貴は完全にゲスト扱いだった。待ち人が来たのに、すっかり色あせて聞こえた。ビブラートがかかったこれが今日まで自分を魅了していたアーティストの歌唱力なのだろうか。それに今あらためて振り返ると、この人の歌で、私も好んで口ずさめる歌が果たして残っているだろうか。いや、いつからなくなっていたのだろうか・・・。信じられない気持ちだった。

帰りにCDを買った。間違えて来てしまったコンサートの記念であり、自戒でもあったのだが、出口のところでお客さん一人一人に握手して送り出していたジュンには、きっと私のことも自分のファンと映ってしまったのだろうか・・・と、あとから彼女は推測する。とにかく丁寧に握手してもらったことはよく覚えている。

「だけどさ、なんで私があの人と握手する羽目になったわけ？」

杏香は納得できなかつた。帰る道々、ずっと考え続けた。とりたてて金井ジュンというアーティストが嫌いというわけではなく、ただ「好き」と呼べる範疇にはないというだけだ。だから今抱えているこの自問の中に嫌みは些かも含まれていない。

しかし・・・なのである。だいたいタイトルがいけない。今回のコンサートならさしずめ「金井ジュン再出発コンサート」とでも付けるべきであろう。

さらに城戸広貴というアーティストが、ただ自分が出るからという理由だけで何とも思わずに他人主体のコンサートをアナウンスして自分のファンも喚ぶような結果をもたらしたということも、かなり問題視されるところではないだろうか。杏香自らが検索して行ったというのならまだ救いがあるのだが、情報のきっかけが公式サイトとなると事情は些か違って来る。広貴および彼のスタッフは本来ならばどこかで「赤とんぼコンサート」が実質的には金井ジュンのコンサートであることを知らせるべきだった。もっともその場合は、杏香は次の機会を待つことになって、自分が思い抱いていたファン像とはかけ離れた人たちに囲まれるようなことにはならなかったはずであるが。

何より彼女にとって重くのしかかった問題は、広貴の歌が自分には響いてこなかった、という事実である。かつて彼は杏香が「日本有数の綺麗な声」と自信を持って聴ける声質と声量とをもって、ポップス、クラシックまで歌いこなしてきた。彼が歌う作品の質が甚だ芳しくないことを除けば、彼は歌手として最高峰の一人であり、逆に言えば、もしオリジナル作品にさえ恵まれていたならば、彼の代表曲はもっと増えて、アーティストとして誰からも好かれ、一目も二目も置かれる存在になれていたはずだと、彼女はずっと思ってきたというのに・・・である。

それに、一体いつ頃から彼女にも口ずさめる歌が広貴のレパートリーから消えていたのだろうか。あるいは変わったのは広貴の歌ではなく、受け止める彼女のほうだったのかもしれないが。

オリジナルアルバムも八作目まではタイトルを全て並べて言えるほど覚えている。しかしそれ以降は『全曲集』ばかりで区別がつかない。レコード会社の企画力の無さも危ぶまれるが、広貴自身にも新しいものを創り出していこうという概念そのものがないとしか思えぬ。

更にこれは最近わかったことだが、彼女が広貴のコンサートに行けなかった原因は、ただ彼女が片田舎にいたせいばかりではなかったらしい。週五日、平日夕方の三時間ほどを、広貴はコンサート以外の活動に充てていることが分かったのだ。そうするとどうなるか。コンサートは月に二度開ければいいほう、内容の再構築など恐らくしないのではなからうか。それではシンガーとして腕がなまっても当然だろう。

「作詩も作曲も不確か、歌い方も変わって、挙げ句の果てにコンサートの機会さえも放棄して・・・こんなシンガー、他にいないよ。私は何をもってファンだと言えるんだろ・・・」

彼女の溜め息は増すばかりだ。なるほど彼も誰といわず丁寧に対応するタイプだ。だがアーティストとはそもそも、歌や絵を通して人々を引きつけるところが無くては成り立たない存在である。ところが今の広貴には、良い作品を送り出そうとする意欲もそのために必要な才能も、歌の意思をより良く歌いきろうとする発想も見いだせないどころか、もともとそういう種類のものを概念として持ち合わせていなかったかのように思えてならない。

いずれにしても、「赤とんぼコンサート」が杏香に与えたものはかなり大きかったものと思われる。それからの彼女は、できるだけアーティストたちに会いに行くようになった。ステージ越しでも何でもよい、とにかくまず自分の目や耳で確かめなければ、と考えるよ

うになったのである。

そして、もしも城戸広貴その人と会ったとしたら、案外彼が唯一の不合格者になっていたかもしれない。あるいはもし自分が広貴の身近で意見が言える立場にいられたなら、有望なシンガーたる彼をきっと今のような姿にはさせなかったに違いないと・・・おこがましいような気もしつつ、杏香は内心そう思っている。ある意味限られた社会において、何らかの理由で甘やかされ、祭り上げられた『地元の名士』と呼ばれる人々にはとかく苦言を呈するさえ避けられる傾向が出来てしまうものだが、彼も不運にもその傾向にあるのではないかと思えるからである。それは彼の公式ホームページの掲示板が専ら雑談的な話題だけで埋められ続け、近年では遂に無くなってしまったことから推測できる。実際、彼女自身も書き込みを削除されたことがある。何気ない書き込みだったが、読みようによっては皮肉にも取られるような表現もあったのかなと、あとから思った。掲示板の管理スタッフか広貴自身がそのような発言を一切許さないような考え方だったのかもしれない。

思えば、ファンになって数年経った頃からそうだった。何か違う、何か違うと感じながら、結局のところ彼女は漠然とした理想像の欠片を彼のほんの一部分に希求していたに過ぎないのだ。彼からはいろいろな文化を教えて貰ったし、それらを我が身の文化遺産として今も抱えている以上は毛嫌いする気にはならないが、さりとして変わり果てたその姿は、あまりにも見るに忍びない。溜め込んでいたビデオ映像は捨ててしまい、彼女が手元に残したものはただ一冊の譜面集と数枚のアルバムのみである。そして、そのような特殊事情を幾つも抱えるような歌い手を、よりによって五本柱の一つに選んでしまった悔いと。

改変履歴：

二〇〇八年九月 第一回発表

二〇〇九年三月 補編

二〇二一年八月 追補

-----  
作品の著作権について：

本作品は、津田理恵子（ハンドルネーム：三毛猫モカ）が「まるまど文学館」サイトにおいて発表したものです。転載・紹介等につきましては、事前に作者当人宛てにメールをいただきたく、何卒よろしくお願い致します。

連絡先： [cosmos\\_biwa@yahoo.co.jp](mailto:cosmos_biwa@yahoo.co.jp)